

(報道)

・山本鼎画伯 肉弾三勇士を描く

『東京日日新聞』 昭和七年二十七日

奉納画になる

壮絶な最期

肉弾三勇士に痛く感激して

山本鼎画伯が描く



写真は山本鼎画伯と古城新聞班長(手前) ちす非常時

廟行鎮びょうこうちんの肉弾三勇士の壮絶なる行為は各方面に異常な衝撃を与へてゐるが、春陽会の重鎮山本鼎画伯もいたく感激し、その劇的な一瞬間の光景

を絵にして永遠に後世へ伝へたいと決意し、二十六日同氏は本社にその材料の提供方を依頼すると同時に、午後二時陸軍省に古城新聞班長を訪ね、絵の制作について援助を与へられたいと懇請したところ、その申出を大喜びで快諾した。山本氏は等身大の大物を描く予定で、五月頃神宮絵画館の壁画を描き終へ次第としかかるはずで、完成の暁あけぼのは本社の手を通じて靖国神社に奉納し遊就館に飾りたいと力こぶをいれている。

### 雪の夜の劇的光景 山本画伯談

「あの記事を見て非常なショックに打たれ感動してしまつたのです。老父は私の洋行の時、身を清めて謹書した教育勅語をはなむけにくれるほどの愛国家ですが、父も私も共に感激し、何か三勇士のためにしてやる事はないからうか」と考へた挙句、自分の腕でやるのが一番いいと思ひ奉納画を決意したのです。

クオ・ヴァヂスの作家シエンキウイチの小説にアンドレー・クミタといふ勇士を書いたのがあつて、昔それを読んで感動したものでした。それは教会の中にたてこもつてスウェーデンから攻めてくる軍勢を一人で食い止めてゐた彼が、单身敵地に忍び込み大砲の中に火薬を仕込んで爆破させるといふ筋でしたが、今度の三勇士は到底それどころではありません。雪があつて薄月夜が鉄条網を照らしてゐる、ひそみ寄る三勇士。爆破する一瞬——光景としても非常に絵画的なのです。ああいふ場合どういふ服装か、

行動か等細かい点についてもよく調査して力をこめて描きたい、そして勇士の霊を慰めたいと思つてゐます。」

『東京日日新聞』 昭和七年二十七日

\*ヘンリック・シエンキエーヴィチ(一八四六一一九一六ポ  
ーランドの小説家)

山本鼎(やまもと かなえ、一八八八—一九四六年)

愛知県額田郡岡崎町(現・岡崎市)出身。十六歳の時、医師である父一郎の診療所開院に伴つて長野県上田市に移り住む。版画を志し木版工房で九年間の年季奉公をする。東京美術学校西洋画科選科予科に入学する。在学中、与謝野鉄幹主宰の雑誌『明星』に刀画《漁夫》を発表し、従来の版画にない新鮮さを示し、新進気鋭の版画家として注目される。自画、自刻、自摺の画期的な創作版画であつた。東京美術学校卒業後、創作版画を手掛ける一方、雑誌にさし絵や文章を投稿する。美術学校在学中に知遇を広めた石井柏亭、森田恒友等と美術文芸雑誌『方寸』を創刊し、美術、文芸の分野に独特の地歩を築いた。また『方寸』の発起人の一人として「パンの会」を発足させ、フランス、パリの美術・文芸振興運動に做つたこの集まりには、石井柏亭、森田恒友、倉田白羊などの『方寸』同人とともに、北原白秋、木下李太郎らがメンバーにいた。大正元年(一九一二年)フランスに渡り、五年間の滞欧生活を経て帰国。翌年、日本美術院洋画部の同人に推挙され、その年の美術院展に《サー

ニヤ》(大原美術館蔵)などを出品して好評を博する。大正十一年の春陽会の創立に加わるとともに、第二の故郷とも言える信州の地で、児童自画運動、農民美術運動を手掛けるなど、美術の大衆化、民衆芸術運動の促進に尽す。長男は詩人の山本太郎。画家で詩人の村山槐多は従弟。